

奈良マラソン救護ボランティア活動報告

福祉部部长 音村 壮太

平成22年12月5日(日)第1回奈良マラソン大会が開催され、今回、フルマラソンのコース沿いに数カ所設けられた救護所のひとつに、救護ボランティアの派遣を行った。平城遷都1300年祭の一環として行われたフルマラソンで、当日は快晴の空の下、真剣に走るランナーから、平城遷都1300年祭マスコットキャラクター・せんとくんのコスチュームに身を包んだランナーまで、7000人以上の参加者が、各々自由なスタイルで楽しむ市民マラソン行事となった。

本会が担当した救護所は、往路20km、復路30km地点に当たる場所にあり、復路30kmを通過するランナーへのケアが、主な救護対象となった。当日は、同じ救護所に、奈良県立医大整形外科教室の医師や、日本赤十字社の職員が居られ、一緒に救護活動を行った。

今回は、マラソンコースが、山裾方面に設定されており、高低差もあった為、一般的な市街地マラソンよりは、下肢への負担が大きく、膝部の疼痛や、大腿部・下腿部の疼痛や痙攣を訴えるランナーが多く、疼痛部分へのアイシングやマッサージ、ストレッチのほか、キネシオテーピング等、各ランナーの訴えに応じて、施術や処置を行った。

30km地点を通過するランナーの人数が増えるに従い、救護所に入ってくるランナーも増加し、途中からは、ランナーの移動に合わせてAEDを持って各救護所を巡回されていた、市立奈良病院の循環器科の医師も加わり、本会会員と医師が協力し、次々と流れ込んでくるランナーへの対応に追われるような状況となった。

今回の救護活動にあたり、気を付けた事に、担当した救護所はゴールまで、まだ10km以上を残している地点にあり、競技ルールとして時間制限もあることから、あくまでも応急処置の範囲に留め、励ましの言葉を掛けながらランナーを送り出すと云う対応を取った事があった。もちろん、専門家として競技の継続が困難と判断した場合は、ランナーに身体状況を説明し、棄権するよう勧める症例もあったが、あくまでもランナーに完走を目指してもらう為の手伝いをするという意識をもって対応に当たった。

最終ランナーが通過し、一段落した頃に、一緒に救護活動を行った医師と意見交換を行い、今後の本会業務への理解と協力への承諾が得られた事は、思わぬ成果であったが、我々の救護活動が、医師の目にも有益なものに映った結果かもしれない。

今回の救護活動で得られた事や反省点を踏まえ、今後の活動に生かし、より充実した事業となるよう継続させていきたいものである。

